

支笏湖チップ 大きく育て放流



市、釣獲安定へ試験 標識付け追跡調査

【支笏湖畔】千歳市は、支笏湖漁協に委託して毎年6月に行っている支笏湖特産のヒメマス(チップ)の稚魚放流を一部試験的に見直す。放流する18万5千匹のうち2千匹について、放流時期を9月に遅らせ、標識などを付けて追跡調査する。支笏湖チップは毎年の釣獲数に大きな波が出る傾向があり、従来より成長させて放流した稚魚の生存率などを調べ、資源の安定につなげる狙い。

(佐藤宏光)

チップの漁期は毎年6月1日から8月末。支笏湖漁協などによると、チップは数年ごとに豊漁と不漁を繰り返す魚で、2018〜20年の釣獲数は3年連続10万匹を超えたが、今年は3万548匹と過去10年で最少だった。漁協などは漁獲の中心となる4、5年魚に弱い個体が多いことが、資源量の減少につながったのではと推測するが、よく分か

- ▲ 標識を取り付けられたチップの稚魚
- ⑤ チップの稚魚に標識を取り付ける作業を進める支笏湖漁協の職員ら

っていない。

資源増殖のため、市は同漁協に委託し、毎年6月、体長6センチ程度に育った稚魚18万5千匹を放流している。今年はこのうち2千匹を放流せずに飼育を継続。9月に入り、体長10センチ程度に育った稚魚に1センチ程度の標識を付けたり、ヒレの2カ所に切れ込みを入れたりして11日までに放流する。

10日は同漁協の施設で、北大水産科学研究院の東条斉興助教の協力の下、標識の取り付け作業が行われた。職員は、麻酔をかけられ動きの鈍った稚魚の背びれ付近に専用の器具で標識を取り付けた。その後、水槽に入れられた稚魚たちは標識を気にせず元気に泳いでいた。

東条助教は「チップの生態には謎が多い。調査で少しでも解明できれば」。支笏湖漁協の佐藤晴一事務局長は「さまざまな研究によって支笏湖チップの保全と安定供給につなげたい」と話している。